あとがき

今回はマックス・ノイマンMax NEUMANN（1949－）の近作油彩展である．1984年から86年に至る18点の展示でうち7点はドローイングである．彼は1974年以来西ベルリンに住み仕事をしている当年38歳のドイツ人作家で，わが国でのM.ノイマン個展は今回が初めてである．

M.ノイマンの芸術については，ベルリンの評論家ローラント・H・ヴィーゲンシュタインさんと本江邦夫さんにお願いし，前掲のエッセイをご寄稿いただいた．厚く御礼申し上げる．またこの展覧会のためにポスターを作成したことを申し添える．

今日，第2次大戦の傷痕を残していまなお生々しいものは幾つかあるが，ベルリン市の東西を隔てる壁はその最たるもののひとつであろう．西ベルリン市は西ドイツの一つの州として格付けされているが，東ドイツにかこまれたこの孤島は今なお，英米仏ソ四ヵ国の共同管理下にあり，西ドイツの航空会社ルフト・ハンザは西ベルリンには乗り入れることはできない．かつてケルンから西ベルリンへ小旅行を試みた時，同じ西ドイツの国内旅行だからパスポートはホテルに置いて行こうと思ったが，念のため持参した．ところが持って行ってよかったのである．西ベルリンを出る時にはパスポートが必要なのである．このように西ベルリンは西ドイツにして西ドイツにあらざる一面を持つ特殊なシティなのである．

この西ベルリンへ私はこれまで5回訪問している．1977年8月，83年9月，84年6月，85年1月そして今年の2月と，私としてはパリ，ニューヨークに次いで訪れる機会の多い都市となっている．この西ベルリンのノートヘルファー画廊（この画廊はヤン・フォスの紹介で知ったのであるが）で私は初めてM.ノイマンの作品をみた．最初に彼の作品――それはノッペラボーの顔の人物であった――をみた時，まずその異様なエネルギーが画面から発散しているのに心を打たれた．これは尋常ではない．本気の絵だ，当画廊の現代人物肖像画展にまず展示しよう，と即座にこの作品を求めた．以来西ベルリンへ行くたびに彼の作品を求めることとなった．第6，7，8回の現代人物肖像画展にペインティング，ドローイング等を展示しているので，彼の作品をご存知の方もおられると思う．

マックス・ノイマン本人と初めて逢ったのは1985年1月25日で，ノートヘルファー画廊を訪問した時，偶然，そこに彼が居合せたのである．ぜひ私のアトリエに来て作品をみてほしいという彼の要望で，翌日訪問した．アトリエは5階にあり，天井の高い30畳ぐらいの広さの部屋を2室ぶち抜いた部屋である．今回，ポスターに使用した作品はここで求めたものである．200号の優品で代表作である．私は当画廊であなたの個展を開催したい旨を申し入れ，彼は了承したのである．

二度目にM.ノイマンと逢ったのは昨年の9月の初め，ベルリンではなく，フィレンツェであった．彼は“ヴィラ・ロマーナ”賞を受賞し，約一年フィレンツェで仕事をしていた．彼のアトリエは小高い丘にあり，テラスに出るとフィレンツェの市街が一望の下に見渡される静かな環境の下にあった．ゲーテの「イタリヤ紀行」が示すごとく，北方のゲルマン民族は南の国イタリヤの陽光に昔から憧れていた．ドイツの画家に対しフィレンツェに留学させる賞を設けているのは充分理解できるところである．このイタリヤの明るい光のもとでノイマンの作品は幾分変ってきたかな，と思いアトリエの作品をみたが相変らず重いのである．表情は変っていない．この作家は自分の内部に独自の強いエネルギーをもっており，外界の影響を受けることが殆んどないと言えそうである．私と女房はフィレンツェに4泊したが，3夕彼と夕食をともにし歓談した．

今年の2月，ベルリンを訪れ，その際M.ノイマン展の最終打合せを行った．その時，彼の案内で，今回カタログのエッセイをご寄稿いただいたヴィーゲンシュタインさん宅を訪問した．驚いたことに広い邸の部屋の壁にはM.ノイマンの作品がビッシリと掛っていたのである．ヴィーゲンシュタイン夫妻は大変な彼のファンでコレクターなのである．依頼したカタログ原稿が速く届いたので，驚いたが，これはヴィーゲンシュタインさんが何時もノイマンの作品と暮らしておられるからだなと納得したものである．

M.ノイマンとノートヘルファー氏はこの展覧会のため来日される．お二人とも日本は初めてときいている．京都にも行きたいとのことである．わが国の滞在が楽しいものであることを希っている．最後にこの展覧会に多大なご協力をいただいた西ベルリンの浜田和子さんに厚く御礼申し上げる次第である．

1987年4月8日

佐谷画廊　佐谷和彦